

この方面について知識の乏しい評者は立入つた批評をなすことは出来ないが、問題があるとすれば第四・五章であらう。殊に「平安時代の中期以後に於て『古代家族』が『積極的に活躍した』とされることは、著者の規定される『古代家族』の概念よりして餘りに時代が降り過ぎてはゐないだらうか、この點に於て著者と見解を異にする清水三男氏の「上代の土地關係を併讀することが有意義である。ともあれ困難で地味なこの方面の研究に弛まず精進される著者の努力には深く敬意を表するものである。」

(A5版・假綴・一七六頁・伊藤書店・價一八〇)(藤谷俊雄)

### 音譯蒙古元朝秘史

東洋文庫叢刊第八 白鳥庫吉譯

内藤湖南先生によつて早く我國に蒙古元朝秘史が將來せられた事は實に我國蒙古學界の幸であつた。直ちに慎重なる那珂通世博士の譯注『成吉思汗實錄』出で、我が學界は一躍して世界の學界を睥睨し得るに至つた。和田清博士が「東亞史論叢」(二四八頁)に於て「一代の碩學が精力を傾倒した結果は、此の最も暗黒なる一時期に莫大なる光明を投じて、後人追従の途を拓いたのであつた」と云はれた如く、これより我國の蒙古學界は駁々として進んだのであつた。然も間もなく原本は葉氏觀古閣に於て影刻刊行されたが、之を語學上に利用されたのはたしか羽田亨博士位であつたので、余も亦驥尾に附して「元朝秘史蒙文札記」と名附くる拙い覺書を「東亞研究誌」上に書いたことがあつた。然し以後も矢張り

史學の方では盛んに利用されたのであつた。

語學としても研究されなかつたのでないらしい。漢字音譯の復原を企圖せられてゐる話は度々側聞してゐたものである。だからヘエニッシュの復原文を見たり、ペリオの復原譯注を聞いたり、陳慶施の校勘を知つたりすると、一步を先に踏み出してゐる我國蒙古學界の爲めに氣をもんだのも其處であらう。今や茲に白鳥博士の音譯を得て我々はやつと安んずるを得るのである。斯學に知名の俊才の補助による三十年の勞作である。慶賀に堪えない。今よりは史學に於ても語學に於ても之を底本として依り得るは幸とすべきである。

この音譯本は葉氏觀古閣刻本を底本として精密なる校訂を加へ、蒙古原文を羅馬字に音譯句讀したるものを對照せしめたもので、尙ほ後に索引が出ると云ふ。若し語の索引をも含むならば蒙古語の研究に便利を與ふること大なるものがあらう。期待に堪えない次第である。

蒙文復原の企圖は早くもボズドネフによつて試みられたが完成しなかつた。その出版せられたる分も極めて珍本であつて中々我々の眼福とはならない。然しボ氏の他著に於ける引用、又ボ氏の音譯を利用したプロオシエのラシッド集史序論などの引用、などで一斑は推し得られる。ウラヂミルツォフの「蒙古社會制度史」にも引用文があるが、これはボ氏に據つたか否やは詳かでない。此等零細なる引用を以て白鳥音譯と對照してみれば、ボ氏ウ氏共に善を盡し美を盡してゐないことは明瞭である。兩氏共

に蒙古學の大家ではあるが漢學には達せなかつたからであらう。漢字篆文であるからにはヘニツシユ及びペリオの方が有利である。

ヘニツシユ本は重を漢字音譯に注いでゐる。白鳥本は漢字校訂も嚴密であるが篆文音譯を大旨としてゐる。此點に於ては白鳥本の方が讀者には便利である。漢蒙合璧は云はでもの事であらう。ペリオは校訂に資すべき庫倫鈔本の年代記の類を参照するらしいから注目すべきものであるが、これは出てみなければ分らない。さうすれば現下學界では白鳥本を第一として取て差支なからう。

白鳥博士の音譯法は必ずしも言語學專家の満足を買はないかも知れぬが、一家の嚴密なる音譯法であつて審かに論議する必要もなからう。たゞ不思議に思はれるのは「合罕」と續かない「罕」一字に全部 *Qan* と長母音の符號があることである。*Qan* ではないけない事が分らない。

音譯法は論じないとして、校訂に於ては少しく考へて見たい。葉氏刻本を採用せられた事は、事を始められた時に在つてはさうあるが當然であらう。今ならば四部叢刊本がよい。四部叢刊本は顧廣圻手校本に洪武璽卷を補入したものであつて葉刻本の祖本に外ならない。博士は之によつて稿本を校するに及ばれなかつたらう、が校刊に當られた人はこの勞を取られてもよかつたらうと思はれる。現に凡例に於ては葉本の錯誤は四部叢刊本誤らずと記してある。若し之に依つて校勘されたれば、例へば卷三の十一、二

行の「歌多勒周」の「勒」字に括弧はいらないし、同じく二十八、三行旁注の「合黑察」に「單個」などとしなくて「獨」字を添えられるし、卷八の二十四、三行旁注「整治了」の下、三十六、五行旁注「甚知」の下に並びに「着」の字が補へるなど、面倒な事が大分に省かれたのである。更には又顧跋に葉本「此數舊無撰人」と注したのも改めて明かに年月撰人の名も入れ得るのであつた。醜を得て蜀を望みたい。

かゝる校定本には誤植は有り勝ちであるに拘らず其の少い事は校刊者に敬意を表する。例へば卷一の二、五行「阿兀站字羅溫勒」の「溫」字や、續卷二の五十、五行 *Yuridansese* の *ne* を脱し、卷四の四十五、五行八字目の「刺」を「列」に誤る如きが見られるが、何れ正誤表に詳かにせられるだらう。

この定本を得て秘史研究が復た盛んになるを期待する。因に、序では矢張り畏兀兒字原本説であるが、余は内藤先生や服部四郎先生と同じく、少くとも漢字本の原本は八思巴字で、蒙古の秘史の名の附せられた時に改寫されたのだらうと思つてゐる。(石濱純太郎)

### 支那農村襟記

天野元之助著

三月下旬、流感に襲はれて三四日臥床を餘儀なくされてゐる間に、天野元之助氏の支那農村襟記(生活社刊)を手にしたところ、行文の平明さと、内容の興味深さとに引きづられて、一氣に讀了した。著者は周知のやうに、滿鐵調査部にあつて、多年この方面